

## ●特別展

「紀伊山地の霊場と参詣道」世界遺産登録10周年記念

# 山の神仏 吉野・熊野・高野

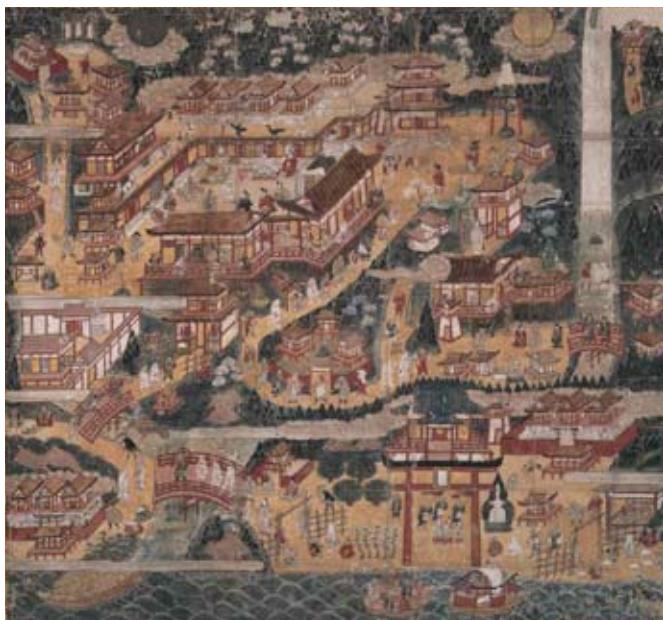
2014年4月8日(火)―6月1日(日)

紀伊半島は本州最南端、和歌山・奈良・三重の三県にまたがる日本最大の半島です。中央には標高1000mをこえる山々が縦横に連なる紀伊山地が形成され、太平洋から吹きつける激しい風、日本有数の降水量に育まれた厳しくも豊かな自然の中で、古代より「聖なる山」として様々な信仰が息づいてきました。

その核となっているのが、役行者を開祖とする修験道の拠点「吉野・大峯」、全国に広がる熊野信仰の中心「熊野三山」、真言密教の根本道場「高野山」であり、これらを巡る「参詣道」を含め、2004年に「紀伊山地の霊場と参詣道」としてユネスコ世界遺産に登録されました。

吉野・大峯、熊野三山、高野山の三霊場は、参詣道を通じて有機的な繋がりを保ちつつ、それぞれ独自の文化圏を形成しています。一方で、日本固有の宗教である神道・修験道と中国・朝鮮半島から伝わった仏教が、併存あるいは融合し現在に至るという共通点が大きな特徴となっています。

世界遺産登録10周年を記念して開催する本展では、吉野・大峯、熊野三山、高野山の三霊場を中心につらられ、篤い信仰をあつめる「神と仏」のすがたを一堂に展観いたします。



紙本着色 那智参詣曼荼羅図  
室町時代 三重・津市神戸第一・第二自治会

## 記念講演会

- 4月12日(土)「熊野の神仏」朝日芳英氏(熊野那智大社宮司)  
4月26日(土)「吉野・大峯の神仏」田中利典氏(金峯山修験本宗宗務総長)  
5月17日(土)「高野山の神仏」山口文章氏(金剛峯寺宗務総長公室長)  
5月24日(土)「紀伊山地の神仏をめぐって」齋藤龍一(当館主任学芸員)  
◎時間: 午後1時30分―3時  
◎会場: 大阪市立美術館1階講演会室  
◎定員: 各150名



木造 大日如来坐像  
平安時代 和歌山・金剛寺



木造 如意輪觀音坐像  
平安時代 奈良・鳳閣寺

## 豊臣家の哀しみ

政治・社会史、建築・庭園史、民俗・芸能史など、美術史を超えたさまざまな専門分野で洛中洛外図に関わる研究が進んでいる。近年はとくに、黒田日出男氏を代表者とする科学研究費補助金（科研）の研究プロジェクトが牽引役となり、江戸時代の洛中洛外図屏風研究に大きな進展が見受けられる。

当館では、平成20年度末に上記科研からの依頼により、旧蔵者にちなんで田万家旧蔵本と通称されてきた洛中洛外図屏風にかかる8×10ポジの新規撮影、並びに高精細画像データ（2000dpi）のコンテンツ蓄積に協力した。翌年には、一隻画面の高精細画像閲覧専用システムをインストールしたディスクの作製、配布がなされた。描かれた事象の分析、読解の絶対量が不足している江戸時代洛中洛外図屏風のさらなる研究進展に寄与するものと期待している。

じきに桜のシーズンである。洛中洛外図を見ると、右隻の東山一帯に桜がキレイに咲いている。ひときわ目を引くスポットはやはり方広寺大仏殿と豊国社（写真上）。ぽかぽかした春の陽気に包まれてのどかに見えながら、ここは豊臣家の哀しみが深く刻み込まれた場所である。大仏殿の背後、豊国社参道入り口にはただモクモクと金雲が立ち込めているばかり。かつてそこに建っていたはずの壮麗な楼門と鳥居がないことに思いをいたしたい。鳥居のない豊国社は、もはや神にあらざる豊國大明神を意味している。

大仏殿の回廊と三十三間堂の間には、慶長19年（1614）6月に完成した鐘楼が立派に描かれ存在感を放っている（写真下）。豊臣家の命運を決したあの鐘が吊られて、今年でちょうど四百年である。この屏風の景観年代の上限として言及されることが多い目印だが、大仏殿のすぐ背後に描かれる五輪塔にも注目しよう。

これは豊臣家滅亡後、徳川家康が大仏殿境内に造立するよう沙汰を下した秀吉の墳墓である。豊國大明神の神号剥奪、豊国社社殿をはじめ社頭一円の破却に加え、阿弥陀力峰山上の秀吉廟墓までも廃することを命じた家康の沙汰は非情極まるものだった。五輪塔の造立は元和2年（1616）8月頃のことと考えられ（「妙法院文書」）、これで屏風の景観年代上限が二年ほど後へずれることになる。

洛中洛外図でこの五輪塔を描く例は大変珍しく、当館所蔵のほかには「洛外図」（奈良県立美術館蔵）があるだけであろう。この「洛外図」には山上の秀吉廟墓まで描かれておりなお貴重である（河内将芳『秀吉の大仏造立』、法藏館）。江戸時代、秀吉の名をはばかってか、「馬塚」と俗称されたこの五輪塔は、明治10年に場所を移動し、豊国神社の宝物館裏手に今もひっそりとたたずんでいる。

また、大仏殿の南に接する妙法院の院家・日嚴院や、豊国社参道脇の智積院を金雲で覆い、その存在を明確に示さない点も珍しい描写といえる。廃絶となった豊国社および周辺寺地を家康から下げ渡され、一躍、恨めしいほどの大寺に変貌をとげた妙法院と



「洛中洛外図屏風」（当館蔵・田万コレクション）右隻部分



智積院である。この一帯からなるべく徳川色を忌避するよう求めた屏風発注者の意図によるものと深読みすれば、ことさらな秀吉墳墓の描写もうなずけるところ。しかしながら、その具体的な事情、背景を今のところ想定するにはいたっていない。

若いころ、小さく写る建物の形、人の姿をなんとかもつとはつきり見れないものかと、洛中洛外図の写真図版に高倍率のルーペをあてて格闘したことを思い出す。近年は画像・情報機器の目覚ましい発達があり、より多くの人たちが、さまざまな方法で洛中洛外図へのアプローチを試みることができるようになった。実作品が近くにある身にとっても多とすべきを実感する。

なお、ここでふれた元和2年の景観年代上限について、左隻の描写を手掛かりとしてさらに下ることが判明した。詳しくは近刊の『大阪市立美術館紀要』第14号をご覧いただきたい。

（知念理）